

靈鷲山（りょうじゅせん）の「場所」について

偉大な悟りを開いた釈迦は、80歳になった頃、それまでもとなく弟子たちに重要な教えを説いてきた靈鷲山（りょうじゅせん）というところで、人生最後の説法を始めた。それを後年、500年ほどあとにまとめて書いたものが「法華経」である。いわば靈鷲山は「法華経」発祥の地である。ではその靈鷲山という「場所」がどういうところかご理解いただきたい。

まずその地点であるが、ネパールのカトマンズから南へ、国境を越えて少し南に行ったところに「パトナ」という都市がある。その少し南に「ガヤー」という都市がみえるが、靈鷲山はその間の少し東にある。靈鷲山のいちばん近くの都市の名は「ラージャグリハ」という。「パトナ」から行くには、国道30Aを「チャンディ」から「ビハール」に出て、国道31を南へ「ナーランダ」「シラオ」と行けばすぐその先が「ラージャグリハ」である。「ラージャグリハ」は、古代に「マダガ王国」の首都であったところだ。漢字では「王舎城（おうしゃじょう）」と書く。もともとあった「王舎城（おうしゃじょう）」は、現在の都市の南にあった。外輪山に囲まれた盆地の中にある都市遺跡だが、考古学的にはあまり解明は進んでいない。北インドでは珍しく温泉が湧き出る。現在の新王舎城はラージギル（ビハール州）という名で呼ばれている。ちなみに、「ナーランダ」は、ナーランダ大学のあったところで、西遊記で有名な三蔵法師がさまざまな仏典を勉強したところである。

靈鷲山は、旧王舎城に残っている「ビンビサーラ王の道」の突き当たりにある。



(<http://daishinji.net/essay/rajgir.shtml> より)



ラージギルはラージャグリハのこと。

そこに靈鷲山がある。

この近くにはその他に八大聖蹟のうち六つの釈迦の有名は聖蹟があるので、
靈鷲山には是非一度は行ってみたいものだ。

(<http://india.avanty-west.co.jp/points/> より)

インダス文明末期の紀元前1900年から紀元前1300年ごろに、インダス川流域からの植民者がガンジス川とヤムナー川の地方（ドアブ）に住みついた。やがてインダス文明が崩壊すると、インドの文明の中心はインダス川流域からガンジス川流域へと移動した。そして、紀元前1000年ごろに先住のドラヴィダ人にかわってアーリア人がガンジス川流域に住み着いたのである。やがてガンジス流域を中心に十六大国と呼ばれる諸国が成立し、互いに覇権を競うようになった。十六大国は抗争を繰り返すが、やがてその中から現在のビハール州を本拠とし、ラージャグリハを首都としたマガダ国と、現在のウッタル・プラデーシュ州北東部を本拠としたコーサラ国が強大化していった。



ウツタル・プラデーシュ州



ビハール州

このころ、当時支配的だったバラモン教に対する批判として、ブッダによって仏教が起こされ、またジャイナ教もこの地域で起こった。やがてパータリプトラに首都を移したマガダ国が、コーサラ国を破ってガンジス流域を統一した。マガダ国ではいくつもの王朝交代があったが、釈迦の没後200年ほど経った紀元前317年頃に成立したマウリヤ朝はアショーカ王の時代にインドをほぼ統一し、初の統一王朝となった。[アショーカ王も熱烈な仏教信者であった。](#)

アショーカ王は釈迦より200年ほど後の人であるが、王という最高権力者の中にアショーカ王のような熱烈な仏教信者が出てきたという事は、釈迦という人が如何に優れた人であったかはもちろんの事、マダラ国という国の「風土」というか「歴史と伝統文化」が如何に素晴らしいものであったかを思わざるを得ない。

なおちなみに、「風土」とはプラトンのいう「コーラ」と同じようなものだが、それらについては私の書いた次のようなものがあるので、それを参照されたい。

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan03.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan04.html>

<http://www.kuniomi.gr.jp/geki/iwai/keikan05.html>

最後に、霊鷲山へのすばらしい旅日記を紹介させていただくので、皆様方ももし機会があれば是非訪れていただきたい。

http://www.geocities.jp/utzutz/india2005/INDO_1216-2.htm

<http://4travel.jp/travelogue/10670067>

旅行会社おすすめの7泊9日の旅もあります。

<http://india.avanty-west.co.jp/recommends/>